

松 山 大 学 論 集  
第 22 卷 第 4 号 抜 刷  
2 0 1 0 年 10 月 発 行

## 教 師 論 攷

—— 松山中学校(現愛媛県立松山東高等学校)初代校長草間時福 ——

豊 島 宏

# 教 師 論 攷

—— 松山中学校(現愛媛県立松山東高等学校)初代校長草間時福 ——

豊 島 宏

## 1. は じ め に

草間時福は、明治初期の我が国の精神的支柱ともいふべき自由民権思想を国民に深く根付かせた福沢諭吉の門下生である。彼は、慶応義塾に学び自由民権思想と弁論術・語学力を身に付けた。その頃(明治8年7月)地方官会議に出席のため上京した愛媛県令岩村高俊は設立間もない松山英学所の経営を委ねる教育者を求めていた。これを聞いた宇和島出身の曙新聞主筆末広鐵腸が慶応義塾を出たばかりの若い彼を推選し、岩村県令は彼に会い、自由民権談義で双方意気が合い、松山に行くこととなった。この間の経過については「懐旧談」<sup>1)</sup>の中に述べられている。

以来、草間時福(以下「草間校長」という)は松山英学所の総教(所長)、松山中学校長(北豫変則中学校→北豫中学校をも含む)として合わせて4年間にわたって学校教育に大きな貢献をするとともに本県に自由民権運動を広く普及させていった。この間、草間校長の薫陶を受け、その後各界に名を馳せた松山中学校出身の諸氏は数知れない。文献で知る限りであるが、薫陶を受けた諸氏の敬慕して止まない心情が随所に見受けられる。

例えば、①草間校長が辞して松山を離れる際、三津浜に向かう沿道に見送りの人黒山となり、岩村県令を始め多くの関係者が別離を惜しみながら見送っていること<sup>2)</sup>

②松山中学校の生徒が明治12年前期末総数213名であったのが草間校長が

去られた後、明治14年2月末には総数102名になった。あたかも先生を慕って上京した者多く、先生がいかに大きな存在であったかを示すものである<sup>3)</sup>。

③40数年後に、各界に功を挙げ名をなし薫陶を受けた諸氏が草間校長を松山に招待し、1週間に渡って先生を歓迎し、歓談して師弟の温情を温めたこと<sup>4)</sup>。

などから草間校長が恩師として如何に敬慕されていたか想像を超えるものがある。

このように多くの人たちを魅了させる草間校長の魅力(教師としての資質・技量)は一体どこにあるのか、この時代特有の自由民権運動家としてのものか、教育者としてのものか、先生自身の人格高潔にして豊かな識見の持ち主であるが所以によるものなのか。

恐らく、それらのどれかを指摘しても本人の魅力を引き出すことにはならないだろう。今挙げたことやそれ以外のことを含めた全てが草間校長の魅力(資質)であるといえる。自由民権運動家及びジャーナリストとしての草間時福については多くの文献に登場し、比較的知られているところである。私に取り上げたいのは上記に示した理由と私が同校の後身現在の松山東高等学校に足掛け12年(教諭9年、校長3年)勤務したことから、「**教育者としての草間校長の魅力**」がどのようなところにあったのかを究明したいとの強い思いにかられたことからである。

そこで、文献資料として永江為政著『四十年前之恩師草間先生』(大正11年刊行)を中軸として、『愛媛県立松山東高校百年史』(昭和53年刊行)、「松山中学校と慶応義塾一初代校長草間時福」『明教』第31号(平成13年刊行)、『近代日本研究』(第24巻平成19年刊行)、「特集・慶応義塾創立150年・慶応義塾福沢研究センター開設25年—福沢門下の自由民権運動家—草間時福小伝—」(寺崎修著)等を参考及び引用して論を進めていきたい。

## 2. 草間時福校長の教師論

### (1) 草間校長の生いたち

草間時福は嘉永6（1853）年5月15日京都御所南門衛士下田好文の4男として生まれ、のち草間列五郎の養子となり、明治3年17歳で上京し、安井息軒、中村敬宇に学び、ついで慶応義塾に入学し、福沢諭吉から教えを受け、明治8（1875）年卒業した。

愛媛県令岩村高俊は、文明開化が叫ばれている折に、それに呼応するのを感じ、松山に英学所を明治8年に設立し、その指導者を求めていたところ、宇和島出身の当時曙新聞の主筆をしていた末広鐵腸の仲介で福沢諭吉の門下生の慶応義塾出たての草間時福と面談し、自由民権論や国家論を議論し意気が合い、県令に請われて松山にやってきた。

### (2) 草間校長の学校での処遇

①松山英学所総教（所長）としての処遇については、県令岩村高俊と本人との間に条約書（「愛媛県英学教師として草間時福雇入に付、双方相談の上左の条を約す」）<sup>5)</sup>を取り交わしている。それによると、雇入期限は満1ヵ年（明治8年7月16日より同9年7月15日迄）（第1条）、給料は1ヵ月40円（第2条）、宿代として1ヵ月2円支給（第3条）、赴任及び帰国旅費として50円ずつ支払う（第6条）、雇入満期後引続き継続する場合はその期限前に契約をかわすこと（第9条）とある。この条約書から判断して、信頼筋からの推奨とはいえ、まだ設立間がない英学所の総教（所長）として新任者を破格の待遇で招聘した岩村県令の度胸の太さを感じさせるとともに、当時優秀な意気を感じた教師の確保のためには厚遇するという雇主の裁量権が認められていたと考えられる。後の夏目金之助（漱石）が松山中学校に新任として校長より高額の80円を月給としてもらっている。

②北豫変則中学校長としての処遇については、翌9年5月になって県では、

教科内容を更に拡大充実させ中学校を設立する機運が高まり、同年6月県側と英学所事務掛と草間時福総教（所長）とで変則中学校設置の準備を進め、文部省からの通知を経て、翌10年6月14日「北豫変則中学校規則」を定め変則ではあるが中学校の体裁を整えていた。

この時の草間校長の「雇入条約書」<sup>6)</sup>には、雇入期限は満1ヵ年（明治10年7月23日より同11年7月22日迄）（第1条）、給料は1ヵ月50円（第2条）、食料宿代は勿論、家具及び奴僕等に至るまで一切自弁（第3条）、満期、帰国旅費50円（第5条）雇中、万一私罪を犯し、裁判官の処分を受けるときは、禁獄中は勿論、鞫問中といえども、一切給料を渡さず、もつとも其処決の上、罪破廉恥甚だしきにあたるか又は其他懲役1年以上の刑を受けるときは、即ち雇を止め、給料は勿論、帰国旅費相渡さざること（第11条）とあり、上記の条約に第11条が新たに加わっている。これは草間校長が前年筆禍事件で裁判所から新聞条例に抵触したことで禁獄と罰金の判決を受けたことからこの1条が加えられたものなのか。

### （3）草間校長の人物像（人間像）

草間校長の人物像について教え子が当時先生に接し先生から受けた感じ方について述懐している文章を文献から抜き出してみると、

①「当時先生は、26、7歳の小壯者である。今ならば乳臭い青年ともいうべき年齢で此創始の創造的計画を容易に仕遂げられたのみならず、小壯であるが頗る沈着で尊厳で、能く部下を統御し、学生を感化せられた。…風貌は肉は瘦せておられたが、体幹長大、眼光鋭く、風姿堂々人を感服するの概があった。其心情に至っては春の如くにして温かい、且つ親しみの深い所があって、今に至る迄、吾々の忘るる事の出来ぬ人格的感化を受けたのである」<sup>7)</sup>

②また、「温情春の如き優しみ溢れ“威あって猛からず”極めて徳望あり、学者的良心の熾烈さ、泉の如き清情溢るる人、若い意気に満ち満ちしていた。落ち着きがあり、冒し難い所があり厳格なる中に温かい優しみが流れてい

る」<sup>8)</sup>などが挙げられている。

#### (4) 草間校長在任中での学校の教授内容

ア. 教育課程（カリキュラム）及び教科目

草間校長在任中の明治11年6月に改正された「北豫中学校規則」（明治11年6月10日付）『明治6—拾一年類似学校』（愛媛県庁蔵）<sup>9)</sup>によると、

①変則中学校で普通の学科を設置—学科には、甲科、乙科の2種類を置く（教則第2条）

- ・甲科の年数は凡5年、乙科の年数は凡3年、甲科は高尚を旨とし、生徒の学識遠大暢達する者とす。乙科は普通を持って目的とし、高尚の学科を学ぶに隙なき者に便す（教則第4条）
- ・甲乙両科の科目として、甲科では、英書科、漢書科、数学科、文書科、口授科、乙科では漢書科、数学科、文書科、習字科、口授科の両科とも5科となっている（教則第5条）
- ・英書科は、英語で書かれた歴史、地理、文学、理科、教育、政治経済等多岐にわたる分野が含まれている。
- ・漢書科は漢文で書かれた内容を翻訳した教科で歴史、漢文、地理等が含まれている。
- ・口授科は、「教授諸書ヲ参考ニシテ修身開智ノ事ヲ談話スルモノナリ」（教則第7条）

とあるように修身等については特に教科書としては取り上げていない。各教師の独自の発想による内容や書物を適宜利用して行っているようである。

- ・学期は3月1日より7月30日迄を前I期とし、9月1日より2月28日迄を後I期としている（教則第11条）

②課業時間は、甲科は毎日英書は2時間、漢書も2時間、数学1時間、水曜日は漢書1時間を作文に充てる、英書1時間を口授に充てる。乙科は毎日漢書

3時間、数学1時間、隔日に漢書1時間分を習字に充て、土曜日には漢書若しくは習字に代え作文とし、水曜日には口授に充てる（教則第13条）

- ・教授法については講義、会読、暗記等適宜これらをおりまぜて教師が授業をする（教則第14条）
- ・科目外として第2、第4土曜日は演説会を開き生徒各自弁舌を練磨し、知識を暢達する（教則第22条）

#### イ. 教科書

①中学校では国の制度上のきちんとした規定がなく、教科書も今日のような公式の指定のものもなく、我が国の文化も未だ幼稚であったため科目については、教授する際日本語の書物がないので国語、漢文及び日本支那の歴史を除いては、多くは英文原書が使われた。

「教え子」が述懐している科目、教科書についてその一部を挙げる<sup>10)</sup>と、「科目も英文、漢文、歴史、地理、物理、生物、植物、数学、代数、幾何、三角等であったので、日本の書物がないので多くは皆英文原書で生理、植物より代数幾何に至る迄原書である」。教科書として、カウツケンボス「合衆国史」「万国史」、スイントン「万国史」、ミル「近古代史」、ギゾー「文明史」、ミル「代議政体」などを挙げている。

②これらの教科書のうち、草間校長は、ギゾーの「文明史」、ミル「代議政体」、スペンサー「教育学」等を担当していたことが文献<sup>11)</sup>の中に示されている。

これらの教科書は、程度としては中学校1、2年、今日でいうと13、4歳に相当することを考えると「かなり高尚なもので内容からいうと、名は中学校であるが、今の中学校とは其当時としては程度が違って居る、思うに先生は慶応義塾より出られたので、学科目及教科書は殆んど慶応義塾の夫に似て居った、慶応義塾は私立ではあるが、高等教育の期間として認められて居たのであるから、夫に髣髴たる此中学校は地方でも高等教育の機関視せられたのも無理もないのである」<sup>12)</sup>と述べられているように、これらの教科書は当時の中学

生にとって高度な内容であって、その内容を理解するには相当な努力が払われたと考えられ、歴史、地理、理科等の教科内容の学習よりむしろ英語読解の力が養われたことと思われる。

#### (5) 草間校長の教授内容及び教授方法

①当時の中学校での教授方法がややもすると「束縛的の形式教育」であったのに対して、草間校長在任時の教育は「新文化の思想を注入させらるるには、頗る努められ」、「自主的自由の教育を施された」<sup>13)</sup>ことで、殊に維新王政復古の中で欧米文明の新思想が注入され「青年学生は頗る意気盛んなる者があった」。このような時代背景の中で松山中学校や市民に強く支持されてきていた自由民権運動が取り入れられたことはこの学校の生徒たちや松山市民にとって大いに活気づけることとなったものと考えられる。

しかも、教育活動の一環として、「第2、第4土曜日ハ演説会ヲ開キ生徒ヲシテ各自ニ弁舌ヲ練磨シ智識ヲ暢達セシム」<sup>14)</sup>とあり、演説会も盛んに行われ、知事や県関係者もそれを聴聞し、関心のある市民なども集まり、論戦が交わされることから嫌がおうにも生徒たちも十分なる準備を重ね勉強にも励んだことと考えられる。まさしく生きた教育が実践されていたということで今日にも大きな示唆を与えるものである。

②草間校長の教育は、「一般教室授業の外に於いて力を致す事鮮やからず、演説会あり、討論会あり、時に題目を定めて文を綴らしめ、式場を設けて圧巻の文を披露せしむ事あり、概ね斯の如く、読書を学ばしむるの外、機会を作りて生徒をして自ら努めて到思発表せしむる事を是れ事とし、以て只管才幹を展べしめん事を勤めさせ、是れ又理想的教育というべきに非ずや、教育法あり、焉ぞ其結果無らん」<sup>15)</sup>と教え子で愛媛師範学校長山路一遊が述懐しているように、草間校長は教室内の授業は、英語原書を通して洋楽を学ばせ文明開化の我が国の諸知識を深めるとともに日本古来の伝統的学問である漢文、歴史、地理、国語も身に付けさせ、さらに、体育にも意を尽くしている。このように、



幅広い教育を行うことによって、社会のリーダーたるに相応しい弁論、修辭、コミュニケーション能力、発表能力を磨き、当時盛んになっていた自由民権運動にも積極的に関わっていき生き生きとした活力ある教育が展開されていたように文献から窺える。

#### (6) 草間校長の教育方針

①草間校長は「懐旧談」の中で、「私は明治8年7月より丁度満4カ年の長き、乏しき校長を受けたもので有ますが、当時一介の少年にて未だ世の経験もなく、教育の何物たるも未だ詳にせず、飄然来って此任に膺ったので今日之を思えば慙愧に堪えぬ次第であり…」<sup>16)</sup>と自戒されながら「此学校より有名な人物が排出し、社会の各方面に渉りて活躍されている」ことについての要因を2つ<sup>17)</sup>挙げられている。

その1つは、「生徒の素質が良くて、何れも俊材であった為である。其素質が善かったのは、久松家御先代当松山藩主爽爾院公の如き英遇の君ありて藩の文化を奨励せられた賜である」と述べられている。

そして、もう1つは「維新も尚ほ創業に属し、内乱相踵ぎ、それに自由主義が勃興して、人心も自ずから緊張して居た為に、少年の精神も自然興起活動して居たのである。…併し、岩村君の有た為に掣肘せらるる事もなく、又助教諸氏が克く私と一心同体となりて、力を尽くされたから出来た事でありまして、結局わたしは、好い時代に好い生徒をお預かりしたのが、私の幸運であった」と述べられ、岩村県令や学校の支援、生徒の優秀さが大きかったことを挙げ謙遜された言い方をされている。

又、「天生我必有用」という名言を挙げられ、我々人間は、天によって生かされ、その能力は一人ひとり持って生まれた良さがあり、それを生かすところに一人ひとりの存在価値があるとし、生きて生まれたことは、過去と未来を連繋する架け橋の役割をなすものであり、そのためには、自らの能力をさらに磨き知を蓄え、徳を修め国や世界に貢献し、「光を添え」て未来へ伝えるべきで

あることを説かれ、古語の「慎終追遠民徳歸厚」を引用し、祖先から受けた文化を大切に身につけながらさらにそれを発展させ次の世代に引き継いでいくことを責務とするようにと説かれている。

②草間校長の教育方針について、教え子が「謝恩の真意」<sup>18)</sup>と題して述懐されているのによると、「当時の学生に対して、親身になって『人間は豪い者に成らねばならぬ、何にでも祖先となれよ、頭となれよ、グズグズして世の流行に追われる様では役に立たぬ、進て世の流行を作らねばならぬ』といつも口に付けて言われていた」とのことである。そして、「先生の此教訓が我が松山中学校の学風と成りて伝わり」と述べ、草間校長が常日頃薫陶されている「自らを磨き、人の先頭に立って、社会に役立つ人間になれ」の言葉を教え子は肝に銘じて巣立っていったといえる。

③草間校長と生徒の繋がりについて、“深い師弟の関係”にあった。教え子の述懐の中に、「師は生徒を我子の如く慈しんで居たから生徒側では、実の親の如くに敬慕して何等の不満もなく『ストライキ』など無論なかった。今では、国民教育が行き渡って7歳で小学校に入り大学を出るまでには百人の教師に替り、先生の名さえ覚えて居る者がないばかりでなく、教師側でも教育を天職とせず、俸給の如何によって転々とする有様だ」<sup>19)</sup>と延べ、当時の教師と生徒との関係が信頼に満ち溢れていた事が窺える。

④草間校長の学校での生徒指導についてしてみると、当時書記として当中学校に勤務していた出筆者が述懐して「草間先生が盛んに自由主義を主張せられたものですから、学校の教育でも、やはり自由教育という様な者であったです。だから生徒は随分乱暴だったです。で或時も生徒が悪い事をしたから処罰するというので、私は鋤を4.5挺買えとお命じになって買いますと『これで表の草を掘れ、之が鋤処刑だ』という。すると、生徒は中に草を掘らずに、表の所々に大きな穴を掘って仕様がな、雨が降ると、其穴に水が溜るので困った。私が先生にそういいますと、そんならもう止めさせ、それだけです」<sup>20)</sup>とあるように、当時の自由でバンカラな気風は若さゆえにかなり暴走の行為が

あったと思われるが校長のユニークな発想に微笑ましさを感じるとともに生徒のヤンチャぶりに啞然とする。

なお、当時の「懲戒」については、『改正北豫中学校規則』（明治11年6月11日付）で、「総則」の項「懲則ニ照ラシテ懲戒ス」（第10条）とあり、具体的には、

- 「第1 譴責—軽キハ本人ニ止リ重キハ証人ヲ呼出シテ命ス、
- 第2 停業—軽キハ1時間ニ止リ重キハ1月間ニ至ル、
- 第3 償金—毀傷紛失セル物件ノ価値ニ依テ定ム、
- 第4 錢役—校堂及ヒ校庭ノ掃除ヲ命スル者ニシテ軽キハ1時間重キハ3日ニ至ル、
- 第5 禁錮—懲戒室ニ入レ外出及ヒ課業ヲ禁スル者ニシテ軽キハ1日ニ止リ重キハ1週間ニ至ル、
- 第6 退舎
- 第7 退校」

などがあるが、上記の校長の処罰は第4 錢役に該当すると思われる。

## (7) 草間校長の生徒への教授状況と生き方在り方及び生徒への指導姿勢

### ① 生徒の勉強状況

教え子の永江為政氏が当時の生徒の勉強状況を追憶して「愛媛県英学所時代には、草間先生が所長と教頭を兼ね、助教として柘植武憲、村井保固、三輪淑載の3氏あるのみ、明教館の講堂の3隅に円くテーブルを囲んで最上級の組は、草間先生親づから之を担当し、其余の課外席の年長者は草間先生と柘植先生の受持、勝山学校から最初に転入した30余名の児童は、其頃の上級生であった右の村井、三輪の両先生が分担せられた。学生一同は、英書を学ぶ以外に、月2回又は3回、明教館の講堂の中央を議場の如く円形に造り、テーブルを置き直して正面に演壇を据え、定期の演説会、若しくは討論会が開かれる。其時は必ず県庁から岩村県令が臨席される。内藤鳴雪翁などは無論のこと県官

中の政論家も毎回出席せられた。討論の問題に就いては草間先生から説明せられた。先生も学生も皆成る<sup>21)</sup>と草間校長が生徒と生き生きと関わっていた様子が窺える。

## ② 生徒の生き方在り方

この事について、草間先生謝恩会（大正10年6月3日第3日目）での草間先生の訓辞。

「生徒は皆能く勉強し、気概もあり、志望も高く、今日有数の人物が輩出して、社会の各方面に涉って活動せられて居るのであります。してみれば、諸君は父兄に比して、より以上えらい人物とならねばならぬ責任があると思う。…凡そ物一得一失を免れない者にして、社会が進み、教育が備わるに随い、それを頼みとし、肝腎の自己は、お留守になり、甚しきは学校にさえ入りて居ればひとりで人物に成れる様に思うのである。これは大なる間違いにて、之に反し、社会開けず、教育なお、不十分なる時は、それを頼みとする念の薄きより、自己を頼みとするに至るので此の差は、学業上、懸隔の結果を来たすのであります。故に、私の諸君に臨む所は、立派な学校にありて、充分なる教育を受けつつありて、而も己を忘れる事なく、人物と成るには、昔しも今も替りはない。この点に注意し、自ら顧みて直前男進せられんことを望むのであり、古き言に、山水秀麗之地は人物を産すといいます。松山の秀麗なる山水も亦諸君に向けて人物に成ることを日夜希望しつつあるのである。故に何卒諸君は此等の希望に慊ひて、天下の人物となり、松山の山水をしてひとり秀麗を壇にせしめざらむ事、これ私が諸君に望むでやまざる所であります。』<sup>22)</sup>

## (8) 草間校長の教科外での教育方針

①『改正北豫中学校規則』の中に「第2第4土曜日ハ演説会ヲ開キ生徒ヲシテ各自ニ弁舌ヲ練磨シ智識ヲ暢達セシム」（教則第22条）とあり、特に、草間校長が先頭に立って演説会、討論会、発表会が開かれ、教員も生徒も積極的に

取り組み、自由民権派の岩村県令を始め、県関係者なども参加し、明教館の講堂が活気と緊張で万来の盛況を博していたことが推測できる。

②この点について「草間先生の教育は、一般教室授業の外に於いて力を致す事鮮からず、演説会あり、討論会あり、時に題目を定めて文を綴らしめ、式場を設けて圧巻の文を披露せしめる事あり、概ね斯の如く、読書を学ばしむるの外、機会を作りて生徒をして自ら努めて致思発表せしむる事を是れ事とし、以て只管才幹を展べしめん事を勉めき、是れ又理想的教育というべき非ずや」<sup>23)</sup>と教え子の永江為政氏も述懐している。このように、生徒にとって一般の教科以外に、自分が学んだことを、多くの人たちと論議したり、発表したりすることで思考力、判断力、決断力などを養い、社会に適應できる“生きる力”が身についてくるものと考えられる。今日の教育において最も重視されていることである。

#### (9) 草間校長の学校経営方針

草間校長の後を引き継いで2代目校長となった宇和島出身の西河通徹先生が草間校長の教育家としての学校経営について次のように述懐されている。

①「草間先輩は実に精神教育の主張者にして、又其實行者なり、主張者必ず実行者に非ざる者世に多し、然るに、草間先輩の精神教育に於けるや確かに能く自ら主張を実行し、即ち知行合一的なりし也、其子弟を教育啓発するに当たって、其感化力の熾烈多大なりしは是に由れり、今之を事実を徴して称述せんと欲せば当時の社会の大勢と各地方に創起せられたる中等教育機関の如何の者なりしや、…当時の国家は廃藩置県（1871）の大改革後…時日を経るなお浅く、旧より新に推移する過渡時代の端緒を開きたる時に属せり、此故に、政治家も教育家も、旧時代の頑迷なる遺風余俗を破壊一掃するに努めて、殆ど其他を願慮するにいとまなきの状態に在りしもの如し、是を破壊一掃する洵に当世の急務なりしと雖も、茲に往往其選択を誤り…古味旧物の醇良善美なる者迄をも併せ排除し去らんとするの弊害に陥り、…風紀の壊乱、士氣の頹廢を招致

せり、而して教育に就いて之を言うも、中等教育に対しては、全国統一の学制未だ備わず、当時各地方の適宜に創立せられたる中学校なる者は、其経費の点に於いて、若しくは亦時代の要求に應じて、急速に人物を養成する必要上等に基因して、亦誠に止むを得ざる者在りしならんも、其組織極めて不完備なりしは言を俟たず、露骨にいえば、多くは是変則英学校或は英漢数学校とも称すべき如き者にして、其教科目の如き、大率ね英学を主位に置き、之に数学と、漢学の2科を附添したるに過ぎざりし者の如し、学校既に然り、其校長、其総教、其教員として招聘任用せられたる者、多くは是れ亦当時、変則速成的に英語を専修したる人物にてありしが如し、唯此一点に於いては、慶応義塾出身たる、当年の草間先輩の如きも亦然かりし、余の如きに至りても、変則的に英書を齧りたる一青年たりし、創業時代に於いては、此変則英学者の蓋し亦社会の必要に應じて生じ来りたる者ならん、新知識の宣伝者として、先生として物識りとして、当世に重宝がられ、世間に珍重せられたる事亦頗る大なる者ありき、而かも此種類の学者先生に就て見るも、亦多くは唯機械的に、其智識の取次ぎ者たる役を勤めたるに過ぎざる如き者の滔々として多数を占め、然らずして自ら能く此間に卓立し、真正なる教育家を以て任じ、精神的に其職責を尽したりと称すべき者は猶ほ晨星の落々なる如く極めて少数を免がれざりしが如し、嗚呼、草間先生の如きは、則ち確かに得難き少数者中の一人にして世間稀に見る所の熱誠なる精神教育たりし也。請う二三の事実を挙げて是を称述せん<sup>24)</sup>と述べ、その例として、

②「創業時代の中学校は、概ね前述の如くにして、体育の如き、多くは殆んど度外視せられ、否な之を度外せざる者にてても、今日如き体操の器具機械の固より不備なりしを如何せん、而して他の一面に於いては我国固有の撃剣、柔術の如きも、当時は是亦封権時代の遺物として放棄せられ、唯古武士の人士の中に於いて、奄々の氣息を保ち居る如き衰微の状態にありき、然るに草間校長は、此間に処して、演武会を松山中学校内に興し、剣道及柔術の教師を、旧松山藩士中に物色して、之を招聘し来り、講堂の板間を以て、柔術其前庭を以て

撃剣の道場に充て、熱心に武技を学生に奨励せり、而して当年の英学者先生たる草間君が、衆に率先して、自ら其道場に立て竹刀を把り、…此武技に奮勉せられたる如き、是現今の学校に於いては普通の事なるも40余年前の中学校にては、実に珍しくもあり、又勇ましき一現象たりしなり」<sup>25)</sup>を取り上げ、当時中学校において体育の必要性が叫ばれてくるのは日清・日露戦争を経過してのことである。

③「此時代の中学校教科中にも、前述の如く漢文の一科を存留し居たり、当年の小壯英学者の多数は、西洋の新智識、新事に心酔するの余り、漢学の如き取るに足らずとして、眼中に留めざる者往々にして然り、随て漢学教育の如きは、唯其員に備わるのみにて、同僚間にも、学生よりも阻害せられて、其持てざる事甚だしく、頗る気の毒の状態に在りたる者少なからざりしが如し、然るに、草間校長は、自ら漢学の素養を有するの人にして、茲に亦古味の深醇鞠すべき者あるを了解し、決して此一科を度外視する如き事なく、漢学教師をも優遇して各々其職に安んじ、其任に奮勉せしめられたり、此一点に於いても亦他の翩々たる当年の英学者流と大に其趣を異にする者あるを見たり。」<sup>26)</sup>と述べ、欧米の文化が持て囃される風潮の中で我が国の伝統的文化を大切に引き継いでいこうとする姿勢は、和漢洋才の一体的吸収の教育を目指しているものであり、その独自性が窺える。

#### (10) 草間校長の学校外での活動

①草間校長は学校での教科外において演説会や討論会を行い、自由民権思想を鼓舞し、生徒にこれらが深く浸透していくとともに公開され、岩村県令を始め多くの自由民権活動家との交流が頻繁に行われ、四国において遅れていた本県の自由民権運動に活力を与えたといえる。

②明治10年6月草間校長は、上京し三田演説会に弁士として登壇しており、その他の要件もあったものと考えられる。その後松山に帰り、同年7月17日に創設されたばかりの自由民権政社公共社の活動に積極的に参画する。

公共社は、土佐や阿波の立志社や自助社の影響を受けた者たちが中心となり同志を集めて結成されたもので、草間校長も之に加わり、「公共社趣意書」を起草したといわれている。

こうして結成された公共社は、あくまで言論活動を重視し、これを支える『海南新聞』を入手することになる。

③旧公共社員加藤景賢氏の述懐によると、「先生は其公共社のために最も御尽力にありし、其際自分も其社の末席に連なり、深く先生の温容に直接し、大に得る所あり、即ち此述懐談を試みるも、先生の薫陶の予沢なり、当時公共社は社員の数50名前後なりしならん、其当時公共社なる者は、単純なる政社にして、討論会と演説会を公開する2者あるのみ、当時先生の演説たるや、言うも更なり、朗々たる言論を以て、非常なる博識と豊富なる蘊蓄を説来り、説去るるや、滔々流暢、誰か其説に感ぜざらん、…時に先生詩あり、蓋し先生席上吟にして…先生の概気外に溢るを知る。其説悉く民権主義に外ならず…」<sup>27)</sup>とあり、校長として学校教育に当たるとともに松山の民権運動の柱の一つであった「公共社」との繋がりで大きな役割を果たしていたといえる。

④草間校長と『海南新聞との繋がりについて、後に衆議院議員となった「教え子」の山本盛信氏が『草間先生謝恩会（五分演説）』の中で「草間先生は、吾が松山に於ける政治的文化の恩人と申す事が出来まし、今の海南新聞の前身を愛媛新聞と言って居りました、明治9年9月11日の発刊だったのですが、同11年に海南新聞と改題しました。木村功君が経営して居りましたのを松山藩士中の有志40余人で、公共社という政社を興しまして、此の公共社が海南新聞を引き受ける事になりました。其時に草間先生は松山中学校の校長であったが、間接に編輯に大分力を竭され、ついに工場迄出て来て手伝うような塩梅でした。又一方に於いて、自由民権論を唱導して盛に討論会とか雄弁会という様な者を開いて、吾々を薫陶した者です。其時分…土佐の板垣君の立志社と気脈を通じて到る所に自由平等を宣伝する者ですから…私等の同志、公共社の連中は努めて議論するので、大抵、公共社の人間が幹部に居るといふ有様でし



た。…不思議な程、言論の権威を認められたのでした。…此無学短才を以て、国会に迄出る事が出来たのも、皆若い時分に於る草間先生の薫陶の賜に外ならないと思います<sup>28)</sup>と述べて海南新聞での自由民権論者としての論客ぶりを発揮されている様子が窺える。

### 3. 草間校長の教育者としての魅力（資質）についての考察

#### (1) 教育者としての資質（力量）

①前述のように、草間校長の教育者としての魅力（資質）について、その生いたち、学校での処遇、教授内容と教授方法、生徒への指導状況と生き方、教科外での教育方針、学校経営での教育方針、学校外での活動等の視点から前掲載した文献資料を参考及び引用して論述してきたところである。

そもそも教育者としての資質（力量）とは如何なるものをいうのか。

この事については、多くの教育研究者、教育関係者によって論述されているところである。それらを見てキーポイントを挙げてみると、1つは、人間的資質（力量）、もう1つは専門的資質（力量）であるといえる。

②まず、人間的資質（力量）について見ると、教育者としての使命感、生徒への深い人間愛、広い視野のものの見方、掌握力、先見性、豊かな感性や人間性等を備えていること。

もう一つの専門的資質（力量）には、教科についての深い専門知識（技術）—教科の教授内容・教授方法の専門的知識・技術（スキル）、学術的智識・技術（スキル）、表現能力、訓育的（生徒指導）知識・技術（スキル）等—、また、学校経営や教育方針についても知育・徳育・体育のバランスの取れた人間教育を目指し、社会と時代に対応できる、所謂“不易と流行”に沿った教育を行える教師であること。

このような資質（力量）を備えた教育者こそ魅力（力量）ある教育者であるといえる。

## (2) 草間校長の教育者としての特色とその魅力(資質)

①草間校長が多くの人たちを魅了した教育者としての特色を人間的資質(力量)－パーソナリティ(人格)、教育への使命感及び姿勢、教育愛等－と教育専門的資質(力量)－教科の教授内容、教授方法、生徒指導観等、さらに学校経営の在り方－などの視点から考察することとしたい。

②草間時福は、松山で英学所総教(所長)、中学校長を足掛け4年勤め、教育者として生徒の教育にあたったがその生徒たちにどう映っていたか、まず、**人間的資質**について見てみよう。教え子の述懐(前掲載)中に「温春春の如き優しみ溢れ威あって猛からず、極めて徳望あり、学者的良心の熾烈さ、泉の如く、清情溢るる人、若い意気に満ち満ちていた。落ち着きがあり、冒し難い所があり、厳格なる中に温かい、優しみが流れている」とあるように、誠実さと、温厚さと威厳と厳しさを兼ね備え、生徒から高い信頼を得ていたものと考えられる。明治初期、初代文部大臣森有礼が「師範学校令」(1886年・明治19年)の中で、教育者として最も備えるべき資質として「順良、親愛、威重」の3つを挙げ、人間性を重視している。まさしく、草間校長にはそれに合致した教育者であったと考える。

③次に教育専門的資質(力量)について見てみよう。生徒からの教育者として高い信頼を得るとともに生徒を魅了するには**教科の教授内容と教授方法(その1)**において高い専門的資質(スキル)が求められるところである。

草間校長は、教科としてギゾーの『文明史』を英語原書で指導している。この授業は卒業間近かにした生徒たちであったようで、授業内容はかなり高いレベルの専門的技術(スキル)が求められていたが、草間校長には備わっていたと考えられる。此の授業には草間校長が強い気持ちを持って取り組んでいたと思われる。その訳は、ギゾーという人物が、草間校長が進めている自由民権運動の思想理念と合致していると考えられるからである。そこで、もう少しギゾーについて見てみると、ギゾー(Guizot, Francois, Pierre, Guillaume, 1787～1874)<sup>29)</sup>は、フランスの政治家(首相・内相・文相・駐英大使等)、歴史家(文

明史・イギリス史・文化史等が主要なテーマである)で、フランス革命(1789年)時の温和的ブルジョアの立場を固執している。そしてアンシャン・レジームの専制主義と革命の民主主義の中庸をブルジョア自由主義の立場から図ろうとする考で、民衆の社会的要求には否定的で立憲君主制を志向していった。歴史家としてのギゾーは立憲君主制を取っていったイギリスに強い関心を示し、『イギリス代議制』、『イギリス革命』等の著述があり、イギリス史の研究に没頭をしている。草間校長は慶応義塾出身者で作っていった交詢社に後に所属し、自由民権運動ではイギリス流の立憲君主制を目指す方向にあり、ギゾーの『文明史』とギゾー自身を授業で担当し、気迫のこもった授業内容が展開されたであろうことは成程と推測される。なお、松山中学校での教科の教科書<sup>30)</sup>は、生徒にとってかなり高いレベルの内容であったと思われる。この事についての教え子の述懐(前掲載)によると「思うに先生は、慶応義塾より出でられたので学科目及教科書は殆ど慶応義塾のそれに似て居った」とある。所でギゾーの『文明史』の英語原書講読は、「改正北豫中学校規則」の「教則」の学科によると第4学年の前期に実施されることになっている。

④**教授内容と教授方法(その2)**として教え子の述懐(前掲載)によると「人間を一定の鑄型に嵌め込もうとする機械的教育者でなく、時代思潮を咀嚼して、子弟を誘って行くという、活きた教育者であった。」「演説会あり、討論会あり、時に題目を定めて文を綴らしめ、式場を設けて圧巻の文を披露せしむる事あり、読書を学ばしむるの外、機会を作りて、生徒をして自ら努めて致思発表せしむる事」と述べているように“生徒がやる気を起こす教育”であり、教育内容が多岐に渡っていることで、生徒が活き活きと活動し、自ら思索し、判断し、人とのコミュニケーション能力を磨き、発表の場での表現能力を高める機会が用意されていたように思える。このことから、生徒たちに自主性、自立心、思考力、表現力、発表能力等社会のリーダーたるに相応しい資質(力量)が身につけていったものと考ええる。

⑤**教育方針**として、草間校長が生徒の将来への方向性を示唆し、先見性を与

える教訓を説諭したことを述懐（前掲載）している。即ち、「天生我必有用」の格言を取り上げ、「我々の現生は、祖先と子孫との中間に立って、之が中軸たる責任を有し、此位置に立つ者ならば祖先より受け継いだ此生に、一層力を加え、光を添えて、之を子孫に伝えねばならぬ、此世に在らむ限り、全能力を尽して、知を進め、徳を修め」（前掲載）るよう説諭し、又、「人間は豪い者に成らねばならぬ何にでも祖先となれよ、頭となれよ、グズグズして世の流行に追われる様では役に立ぬ、進で世の流行を作らねばならぬ」（前掲載）など、自ら一人ひとりが将来へ向けて目標を定め、使命感を持って生きていくことを強く説いている。この事は、今日の刹那的で、目先のことにしか目が届かない若者への警告でもあり、今日でも光り輝く訓辞として生き続けるものといえる。

⑥教師と生徒との関係の中で最も大切なことは「相互の信頼関係」であると考える。教師が生徒を信頼し、生徒が先生を敬い、慕う関係である。このような関係が草間校長と生徒との間で十分構築されていたと次の述懐（前掲載）から頷ける。

○草間校長の「懐旧談」の中で「私は、当時一介の少年にて未だ世の経験もなく、教育の何物たるも未だ詳にせず、飄然来って此任に膺った…此学校より有名な人物が輩出したのは…生徒の素質が善くて、何れも俊才であった為である。」とし、生徒の「学ぶ」意欲を信頼し、生徒の能力を十分に引き出す教育を進めていたことが推察できる。また、教え子の田内栄三郎氏は草間校長を招待しての大講演会の中で「子弟の関係も深く、師は生徒を我子の如く磁くしんで居たから、生徒側では実の親の如くに敬慕して、何等の不満もなく『ストライキ』など無論なかった」と述べており、生徒の先生に対する強い信頼関係の絆の深さを感じさせる。

⑦草間校長の**学校経営**については、「不易流行」の教育を目指していたものと考えて。「不易流行」とは、俳諧用語で、晩年の芭蕉が、蕉風俳諧の本質を捉えるための理念として提起したもので、「不易」とは、時代の新古を超越して不変なるものを指し、「流行」は、そのときどきに応じて変化していくもの

を指している。具体的に教育の分野で考えると、「不易」とは、人間として人格の完成を目指すものと考え。人格の完成を目指すためには、知・徳・体の調和の取れた人間形成であり、この指針は時代を超えて不変的なものであると考える。この点で、草間校長の学校経営は、知・徳・体の取れた「人格の完成」を目指すものであったと言える。校長の目指した「知育」は、中学校レベルとしてはかなり高い教育内容と教育方法を展開し、即ち、一般教科だけでなく、討論会、演説会、発表会、作文作成等を通して思考力、表現力、発表能力、コミュニケーション能力、語学力等を磨き、高い識見と教養、社会性を身につけさせていったといえる。「徳育」では、2代目の校長となった西河通徹氏が述懐（前掲載）しているように、「草間先輩は実に精神教育の主張者にして、又其实行者なり、…即ち、知行合一的なりし也、其子弟を教育啓発するに当たりて、其感化力の熾烈多大なりし」と述べ、また、人間として、武技を通して心と身体を練磨することで精神修養を図ることを実行に移していった。また、「体育」についても、「創業時代の中学校なる者は、体育の如き、多くは殆ど我国固有の撃剣、柔術の如きも、当時は是亦封建時代の遺物として放棄せられ、…この間に処して演武会を興し、剣道及柔術の教師を旧松山藩士中に物色して、之を招聘し、此武技に奮勉せられ…」と述べ、草間校長は体育も重視し、体育の教科に取り組んでいき、「文武両道」を学校の教育指導指針とし、後々までも引き続けられ、当校の悠久の支柱となっている。

そして「流行」とは、時代の流れに即応して之に対応することを言う。明治政権の創設期に、薩長を中心とする専制政治が展開されていったが之に反発して、西欧の自由民権思想が福沢諭吉の『学問のすずめ』などによって移入され、国民の間に深く浸透して自由民権運動として発展されていった。このような大きな国のうねりの中で、草間校長は、慶応義塾の福沢門下生として、自由民権思想と弁論術、それに語学力を磨き、松山にやってきて、松山中学校生や松山市民、愛媛県民に、演説会、討論会などを通じて、広く自由民権運動を呼びかけていくとともに「公共社」という政社の設立、発展にも携わり、「海南新聞」

にも編集者として自由民権の筆を振るった。そのことにより、隣の高知県や徳島県より遅れを取っていた愛媛県の自由民権運動に活力を与え、県民の中に深く根づいて行ったといえる。これは草間校長が時代の流れをいち早くキャッチして的確に対応し、生徒や市民、県民から大きな支持を得たことを示しているといえる事例である。

#### 4. お わ り に

草間校長は、愛媛県令岩村高俊の招きで慶応義塾を卒業してまもなく松山にやってきて、松山英学所総教（所長）、松山中学校長（北豫変則中学校→北豫中学校をも含む）として4年間在任し多くの教え子や松山市民、県民に国民的盛り上がりを見せていた自由民権思想を浸透させ、活気ある学校づくり、町づくりに貢献した。今回のテーマは、「草間校長の教育者としての魅力（資質）」について、教え子の述懐を中心に考察してきたところである。今回参考にした中心の文献資料は、薫陶を受けた教え子たちが40数年後草間校長を松山に招待し1週間に渡って大謝恩会・講演会を繰り広げた事の内容などを盛り込んだ永江為政著『四十年前之恩師草間先生』である。先生を讃える諸会での報告書であることから礼讃の内容や語句が含まれている事は避けられない。これらについては出来るだけ斟酌して草間校長の教育者としての魅力（資質）を考察していったつもりである。ご意見いただければ幸いである。今後、草間校長の教育者としての魅力（資質）について、さらなる文献資料が発掘され新たな魅力（資質）が引き出されることを期待して止まない次第である。

#### 注

- 1) 永江為政著『四十年前之恩師草間先生』中の草間先生謝恩会（大講演会）が開かれ、本人が回顧して講話した内容、P122-128
- 2) 上記著書 P39、『愛媛県立松山東高校百年史』（昭和53年刊行）のP154にも同数で記載
- 3) 上記著書 P47

- 4) 上記著書 P61 以下
- 5) 上記著書 P22, 上記記載の同校百年史の P530
- 6) 上記著書 P32-33
- 7) 上記著書 P78-79 教え子森盲天外氏の述懐「地方文化の恩人草間時福先生を迎えて」
- 8) 上記著書 P81 教え子田内栄三郎氏の述懐「臈氣に浮かぶ草間先生の風ほう」
- 9) 上記記載の同校百年史の P540-544
- 10) 上記著書 P78 教え子森盲天外氏の述懐「地方文化の恩人草間時福先生を迎えて」 P  
138 山路一遊氏（愛媛県師範学校校長）の述懐「草間先生校長時代の松山中学校の教育法  
について」
- 11) 上記著書 P138
- 12) 上記著書 P78 7) に同じ
- 13) 上記著書 P141 岩崎一高氏（伊豫公論社長）の述懐「草間先生を迎えて」
- 14) 上記記載の同校百年史の P544
- 15) 上記著書 P139 山路一遊氏の述懐
- 16) 上記著書 P124 草間校長の「懐旧談」
- 17) 16) に同じ。
- 18) 上記著書 P117-118 永江為政氏の「謝恩の真意」—四十六年を回顧して—
- 19) 上記著書 P101 田内栄三郎氏の述懐「深い師弟の関係、今と昔とは大変に違う」
- 20) 上記著書 P147 玉井敬温氏の述懐「ア、四十年前の草間先生」
- 21) 上記著書 P24-25 永江為政氏の述懐「岩村県令と草間先生の学風」
- 22) 上記著書 P99 草間先生訓辞「松山中学校に於いて」（草間先生謝恩会講演会）
- 23) 上記著書 P139 15) に同じ
- 24) 上記著書 P156-157 2代目校長（同僚）西河通徹氏の述懐「教育家としての草間時福  
君」
- 25) 上記著書 P157 24) に同じ
- 26) 上記著書 P157 24) に同じ
- 27) 上記著書 P143 加藤景賢氏（旧松山公共社員）「草間先生の歓迎会に列りて」
- 28) 上記著書 P149 教え子山本盛信氏（後に衆議院議員）の述懐「政治的文化的恩人草間  
先生」
- 29) 人物「ギゾー」についての活動略歴は、『世界歴史辞典』（平凡社）を参考
- 30) 上記記載の同校百年史 P540-543 「改正北豫中学校規則」の教科書として使用されて  
いた物について第12条甲乙科業表に学年と時期を含めて提示されているので甲科の部分  
について挙げることにする。なお、口授科の教科書は提示されていない。

	英書科	漢書科	数学科	文書科
第1年 前期	・ウエブストル「綴書」 ・ウイルソン「第一読本」・ 「第2読本」	・日本地理小史 ・国史概要 ・皇朝史略正編	・四則 ・諸等	・綴語
第1年 後期	・地理書 ・ビネラ「文典」 ・バーレー「万国史」	・皇朝史略続編 ・続国史略	・分数 ・少数	・通俗書牘
第2年 前期	・カッケンボス「米国史」・ 「物理書」 ・コロネル「天然地理学」	・十八史略 ・続十八史略	・比例 ・按分比例	・通俗牘
第2年 後期	・ハチソン「生理書」 ・チャンプル「近世史」	・日本外史	・百分算 ・利息算	・漢文和訳
第3年 前期	・万国史 ・第四読本	・近世日本外史 ・日本政記	・混和法 ・開法	・漢文和訳
第3年 後期	・第五読本 ・ウエランド「大経済書」	・春秋左氏伝	・連数 ・求積	・復文
第4年 前期	・ウエランド「大修身書」 ・ギゾー「文明史」	・史記	・代数 ・記簿法単記	・復文
第4年 後期	・ヘヴン「心理書」 ・ケレー「交際学」	・文章軌範正統	・代数 ・幾何 ・記簿法単記	・和文漢訳
第5年 前期	・ロジック ・スペンサル「教育論」	・八大家読本		・和文漢訳
第5年 後期	・ウールシー「万国公法」 ・ミル「代議政体」	・八大家読本	・平三角 ・弧三角	・漢文諸体